島崎藤村全集 3

島崎藤村全集　3

島崎藤村全集 3

昭和三十一年十月十日発行
定価 二〇〇円

著者 島崎藤村

発行者 古田晁
東京都千代田区神田小川町二ノ八

印刷者 勝畑四郎
東京都三鷹市上連雀九九〇

発行所 筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話 東京(29)七六五一(代表)
振替 東京一六五七六八

印刷 株式会社三省堂
製本 和田製本工業株式会社

目次

旧主人……三
藁草履……毎
爺……八九
老嬢……一〇五
水彩画家……一三三
椰子の葉陰……一九五
津軽海峡……二〇九
朝飯……二三三
家畜……二三九

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertc

旧主人

一

今でこそわたしもこんなにふとってはおりますものの、その時分はやせぎすな小作りな女でした。ですから、隣の大工さんのお世話で小諸へ奉公に出ました時は、人様が十七に見てくださいました。わたしの生まれましたのは柏木村——はい、小諸まで一里と申しておるのです。

柏木界隈の女は佐久の丘の上に生活をたてて、荒い陽気を相手にするのですから、どうでも男を助けて一生激しい労働をしなければなりません。さあ、その激しい労働をするからでもありましょう、わたしの叔母でも、母親でも、強いはしこい気象です。わたしは十三の年からおふくろについて野らへ出ました。同じ年かっこうの娘はまだ鼻をたらしてなわ飛びをして遊ぶ時分に、わたしはもう世の中のうれしいもかなしいもわかり始めましたのです。うちでは子供もふえる、小商売には手を焼く、父親はのらくらであてにもなりませんし、なんぼ男まさりでもおふくろの腕一つではやりきれませんから、否でも応でもわたしは口を預けることになりました。そのころ下女の給金は衣装こちら持ちの年に十八円ぐらいがとまりです。しかし、わたしは奥様のお古か何かで着せていただいて、そのほかは相応な晴れ着のおあてがいという約束に願って出ました。

お金でいただいたら、またおやじに飲まれはすまいか、という心配がおふくろの腹にありましたのです。

出るにつけても、おふくろはひとりで気をもんで、「旦那様というものは奥様次第でどうにでもなる、と言っては済まないが」から、「御奉公は奥様のごきげんを取るのが第一だ」まで、さんざん寝物語に聞かされました。忘れもしない。おふくろに連れられて家を出たのは三月の二日でした——山家ではこの日を出替りとしてあるのです。すこし風が吹いて土ぼこりの立つ日でしたから、はしゃいだ砂交じりの灰色な土を踏

んで、小諸をさして出かけました。おふくろは新しい手ぬぐいをかぶって麻裏ばき。わたしは朽黄の地木綿のふろしき包みをさげてついてまいりましたのです。こうして親子連れで歩くということが、なぜかこの日に限って恥ずかしいような悲しいような気がしました。浅々と青くもえそめた麦畑のわきを通りますと、ちょうどその畑の土と同じ顔色の百姓が鍬を休めて、わたしどもを仰山らしくながめるのでした。北国街道は小諸へはいる広い一筋道。そこまで来れば楽なものです。昔の宿場風の休み茶屋には旅商人の群れがおりました。「唐松」という名高い並木は切り倒される最中で、大木の横倒しになる音や、高い枝の裂ける響きや、人足の騒ぐ声は戦闘のよう。わたしどもは親子連れの順礼とあとになりさきになりして、松葉の香を踏んで通りました。

小諸の荒町から赤坂を降りて行きますと、右手に当たって大きなねずみ色の建物は小学校です。その中の一棟は建て増しの最中で、高い足場の中には塔の形が見えるのでした。その構え外の石垣について突き当たりました所が袋町です。それはだらだら下がりの坂になった町で、浅間のほうから流れて来る川のわかれが浅く町中を通っております。このながれを前にひかえて、土塀から柿の枝のたれさがっている家が、わたしどもの尋ねてまいりました荒井様でした。見付きは小諸風の門構えでも、中へはいれば新しい格子作りで、二階建ての閑静なお住居でした。

ちょうど、旦那様のお留守、おふくろは奥様にばかりお目にかかったのです。奥様はまだお若くって、大きな丸まげに結って、桃色のてがらをかけたおかたでした。ものごしのしおらしい、背のすらりとした、黒目がちの、つくればつくるほど見まさりのしそうなおかおだち。地のお生まれでないということは美しいお言葉で知れました。奥様の白い手に見比べると、おふくろのは骨太な上に日に焼けて、男の手かと思われるくらい。

「奥様、これはお恥ずかしいものでございますが、ほんの

おしるしばかりに。」

とおふくろは手みやげを出して、炉ばたに置きました。

「あれ、そんな心配をしておくれだと……それじゃかえってお気の毒ですねえ。」

「いいえ、どういたしやして。家でこしらえやしたみそづけで、召し上がられるようなものじゃごわせんが。」

「それは何よりなものを——まあ、お茶一つお上がり。」

「もうどうぞお構いなすってくださいますな。」

「よくまあ、それでも早く来てくれましたねえ。あの、なんですか。名はなんと言いますの。」

「はい、お定と申しやす。まことに不調法者でごわして。どうかまあなにぶんよろしくお願い申しやす。」

わたしはつんつるてんの綿入れに紺足袋ばきという体裁で、奥様に見られるのが何より気恥ずかしゅうございました。おそばへよれば心持のいい香水が顔へにおいかかるくらい、見るものも聞くものもわたしには新しく思われたのです。御奉公のお約束もまとまりました。おふくろははでなお暮らしや美しいお言葉のなかにわたしをひとり残しておいて、柏木へ帰ってしまいました。

御本宅は丸茂というのれんを掛けた塩問屋、これは旦那様のお兄様で、わたしのあがりましたお家は新宅と申しました。御本宅は大ぜい様、奉公人も十人の上使っておりましたが、新宅は旦那様に奥様、奉公人といえばじいさんが一人と、そこへわたしが参りましたから、合わせて四人暮らし。御本宅は昔かたぎの土地風。新宅はまた東京風。家のつくりを見比べてもわかるのです。旦那様は小諸へ東京を植えるという開けた思想をお持ちなすったおかたで、おみなりも、お言葉も、旧弊はいっさいお廃し。それを御本家ではしじゅう憎んでいるということでした。

まあ、聞いてください。世には妙なかおだちの人もあればあるもので、泣いている時ですら見たところは

笑っているとしか思われないものがあります。旦那様のがちょうどそれで、目のまわりの筋の縮んだぐあいから口元と頬の間に深いしわのある御様子は、まったく旦那様のお顔を見ると笑いが刻んであるようでした。さ、そのお顔です。一時も油断をなさらないまじめなこころの旦那様が、こうしたお顔でいらっしゃるということは、不思議なようでした。しかし、それが旦那様のお人のいいという証拠で、お生まれつきの普通の人とは違ったところでしょう。いったい、寒い国の殿方にはぐずぐずしたぶしょうな癖があるものですけれど、旦那様にはそれがありません。よくもああからだが動くと思われるくらいに、まめな働き好きなおかたでした。

小諸で新しい事業とか相談とかいえば、だれはさしおいてもまず荒井様という声がかかる。小諸に旦那様ほどの役者はないと言いましたくらいです。

わたしが上がりましたころの御夫婦仲というものは、外目にもうらやましいほどのおむつまじさ。旦那様は朝早く御散歩をなさるか、お二階でお調べ物をなさるかで、朝飯前には小原の牛の乳を召し上がる。九時には帽子をかぶって、前だれがけで銀行へお出ましになる。お休みの日にはお客様を下座敷へ通して、お話でした。尋ねて来るお客様は町会議員、大地主、商家の旦那、新聞屋、いずれも土地のお歴々です。お夕飯のあとは奥様とおさしむかい、これは一日のうちでも一番楽しい時で、笑いさざめくお声がお部屋から漏れて、耳をなぶるように炉ばたまでも聞えるくらいでした。その時はコーヒーか茶を上げました。

思えば結構ずくめのお暮らしです。わたしはランプのもとでぞうきんを刺し始めると、柏木のことが目の前に浮いて来て、毎晩癖のようになりました。こちとらの卑しい生涯では、農事が忙しくなると朝も暗いうちに起きて、あかりをつけて朝飯を済ます。東の空が白々となれば野らへ出て、一日働くと女のからだは綿のようです。ある時、わたしはおふくろといっしょに疲れきって、草の上にころんでいると、急に夕立ちが

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertc

落ちて来た、二人とも起き上がる力がないのです。汗臭いからだを雨に打たれながら倒れたままで寝ていたこともありました。その時にあとでひどい熱病を煩って死ぬほどの苦しみをいたしました。農家の女のつらさはどれほどでしょう——麦刈り——田の草取り、それから思えば荒井様の御奉公は楽すぎて、毎日遊んで暮らすようなものでした。獣のように土だらけな足をして谷あいを駆け歩いたわたしが、けっこうな畳の上では居眠りも出ましたくらいです。

何一つ御不足ということが旦那様と奥様のなかにはありません。ただお似合いなさらないのはお年です。ある日のこと、下座敷へお客様が集まりました。旦那様は細かい活版刷りの紙を広げて御覧なさる、皆さんが無遠慮なかたばかりです。「こりゃひどい、まるで読めない。」と旦那様はその紙を投げ出しました。

「なるほど、お若いかたの読むんで、われわれの相手になるものじゃありません。ここのところなざあ、細いすじのようです。」

と言いながら、一人のお客様はたもとから銀縁の大きなめがねを取り出しました。玉のほこりをじゅばんのそで口でふいて、釣針のようにとがった鼻の上に載せて見て、

「これならわたしにも、はっきりとはいきませんけれど……どうかこうか見えます。」

「へえ、ちょっとそのめがねを拝借。」とほかのお客様が笑いながら受け取って、「なるほど、むむ、これならはっきりします。」

旦那様も笑ってそりかえりました。やがて、めばたきをしたり、目をこすってみたりして、めがねを借りようとはなさいません。

「まあ、めがねはもう二三年かけないつもりです。かけたほうが目のためにはいいと言いますけれど。」

「ですから、わたしなざあ何か読む時だけかけるんです。」とめがねを出したかたは仔細らしく。

「驚きましたねえ。」とその隣のかたが引き取って、

「こんなによく見えるのかなア。ハ、ハ、ハ、こりゃめ

がねを一つおごるかな。」
しまいには旦那様もつりこまれて、
「拝借。」と手をお出しなさいました。
一人のお客様が笑いながら渡しますと、旦那様もおもしろそうに鼻の上へ載せて、活版刷りの紙を遠く離したり近く寄せたりして御覧でした。
「かけた工合は……どうですな。」と渡したかたが旦那様のお顔をのぞくようにして尋ねる。
「や、こりゃよく見える。これをかければすっかり読めます。」
「ハ、、、、、ひどいものですなア。」
と旦那様も手を打って大笑い、一人のお客様は目から涙を流しながら、腹をかかえて笑いました。しまいには皆さんが泣くような声をお出しなさると、とがった鼻のお客様は頭をかかえて、お座敷から逃げ出しましたのです。
わたしも旦那様がこれほどであろうとは思いませんでした。人ほど見かけによらない者はありません。これから気をつけて見ると、髪も人知れず染め、鏡を朝晩にながめ、お召し物の縞もはでなのを撰り、忌み言葉は聞いたばかりでいやなお顔をなさいました。ことに寝起きの時のお顔色は、いつもすこし青ざめて、老い衰えた御様子がありありとわかりました。知恵の深そうな目のお色も時によるとどんよりうるみをもって、疲れ沈んで、物を見つめる力もないというふうに変ることがありました。わたしはまた旦那様の顎から美しく白く並んだお歯がはずれるのを見かけました。旦那様は花やかに若くいろどった年寄りの役者なのです。住み慣れて見れば、それもおかしいとは思いません。お二人のお年違いもいっそお似合いなされて、かれこれと世間から言われるのが悲しいと思うようになりましたのです。
奥様は御器量を望まれて、それで東京からおかたずきになったと申すくらい、お湯上がりなどのお美しさといったら、女のわたしですらほれぼれとなってしま

うほどでした。旦那様がじっと奥様の横顔をおながめなさるときは、もう何もかも忘れておしまいなすって、芝居好きがひいき役者に見とれるような目つきをなさいます。聞けばこの奥様の前に、長いこと連れ添ったおかたもあったとやら、無理やりの御離縁もつまりは今の奥様ゆえで、それから御本宅と新宅のなかが自然水のようになったということでした。

たとえて申しましょうなら、御本宅や御親類は蜂の巣です。そこへ旦那様が石を投げたのですから、奉公人のわたしまで痛いうわさに刺されました。

しかし、山家がどれほど恐ろしい昔かたぎなもので、すこし毛色の変った他所者と見れば頭から煮え湯を浴びせかけるということは、まったく奥様も御存じない。そこが奥様は都育ちです。御親類のお女中がたは、いずれもじみなおかたばかりですから、わけても奥様お一人が目立ちました。奥様は朝につくり、晩にみがき、透きとおるようなお顔色の白すぎてすこしあおく見えるのを、頬のへんへはほんのり紅をさして、身のたけにあまるほどの黒髪は相生町のおせんさんに結わせ、かみそりは岡源のおふくろにあてさせ、お召し物の見立ては大利の番頭、仕立ては馬場裏の良助さん——はでのせんさくをしつくしたものです。田舎の女ほど物見高いものはありません。奥様が花やかな御風俗でお通りになる時は、土壁の窓からながめ、障子の穴からのぞき、目と目を見合わせていやな笑いかたをするのです。そんなことは奥様も御存じなしで、御慈悲に拝ませてやるという風をなさりながら町をお歩きなさいました。たまたま道で御親類のお女中がたにお会いなさることがあっても、高いごあいさつをなさいました。奥様の目から見ると、この山家の女は松井川の谷の水車——毎日同じことをして回っている、とまあ映るのです。たとえ男が長い冬の日を遊び暮らしても、女はよく働くという田舎のありさまを見て、てんで笑っておしまいなさる。まったく、奥様は小諸の女を御存じないのです。これを御本家初め御親類のお女中に言わせるとせっかくきゃしゃな当世の流行を捨

て、娘にまで手織り縞で得心させている中へ、奥様という他所者が舞いこんで来たのは、開けてぜいたくな東京のくらしを一きれさげて持って来たようなもの、としか思われないのでした。ですから、親身の旦那様よりか、他人の奥様に憎しみが多くかかる。町々の女の目はほめるにつけ、そしるにつけ、奥様の身一つに向いていましたのです。

春も深くなっての夕方には、お二人で手を引いて、おそ咲きの桜のかげから飛騨の遠山の雪をながめながめ静かに御散歩をなさることもありました。さあ、旧弊な御親類のお女中がたは、御夫婦いっしょにお花見すらしたことがないのですから、こんな東京風——夢にも見たことのない、むつまじそうに手を引き連れてうちの外をお歩きなさる御様子を初めて見て、驚いてしまいました。得たり賢しと、りんき深い手合いがつまらんことを言い触らして歩きます。わたしは奥様のおうわさを聞くと、くやしいと思うことばかりでした。

春雨あがりの暖かい日に、わたしは井戸ばたで水くみをしておりますと、おつぎさん——やはり柏木の者で、小諸へ奉公に来ておりますのが通りかかりました。

「おつぎさん、どちらへ。」

と声をかけると、おつぎさんはほおずきを鳴らしながら、小ぶとりなからだをちょっと揺すって、

「ごれ。」とそでに隠した酒のびんを出して見せる。

「お使いかね。」

「あゝ。」

「御苦労さま。」

「なあ、お定さん、おまいんとこの奥さんは……あのおめくらさんだって言うが、ほんとうかい。」

「まあ、おつぎさんの言うこと。」

「ホ、ホ、、、、、だっても評判だよ。こないだの夕方、ホラお富ばあさんなあ、あの人が三の門の前に立ってると、おまいんとこの旦那様と奥様が懐古園のほうから手を引かれて降りて来たと言うよ。おらい

やだ。おめくらさんででもなくて、手を引かれて歩くという者があるもんかね。」

「バカをお言いよ。」

とわたしは水をかけるまねをしました。おつぎさんはおしりをたたいて笑いながら、

「いい御主人を持っておしあわせ。」

と言いすてて逃げる拍子に、ぬかるみへ足を突っ込む、容易に下駄の歯が抜けない様子。「それ見たか。」とわたしは指さしをして、思うさま笑ってやりました。わざと、

「どうもまことにお気の毒さま。」

井戸ばたに遊んでいたあひるが四羽ばかりくちばしをそろえて、わたしのほうへ「ぐわアぐわア」と鳴いて来ました。いまいましいものです。わたしはひしゃくで水を浴びせかけると、あひるはさもうわさ好きなおばあさんぶって、どろの中をよろよろしながら鳴いて逃げて行きました。

二

台所の戸に白いすももの花のにおうもわずかの間です。山家の春は短いもので、すしよ田楽よ、やれそれとすりばちを鳴らしているうちに、若布売りの女の群れが参るようになります。越後なまりで、「若布はようござんすかねえ」と呼んで来る声を聞くと、もう春蚕で忙しい時になるのでした。

御承知のとおり、小諸は養蚕地ですから、寺の坊さんまでが衣のそでをまくりまして、仏壇のかげに桑の葉じょきじょき、まあこれをやらない家はないのです。奥様はお慣れなさらないことでもあり、おきらいでもあり、蚕のにおいをかげば胸が悪くなるとおっしゃるくらいでした。御本家のお女中がたが灰色の麻袋を首に掛けて、桑の新芽を摘みにお出なさる時も、奥様は長火ばちにもたれて、東京の新狂言のおうわさをなさいました。

もともと旦那様は奥様に御執心で、お二人で楽しいお暮らしをなさりたいというほかに、別にお望みはないのですから、ただもううれしいというお顔を見たり、お声を聞いたりするのが何よりのお楽しみ——こうもしたらお喜びなさるか、ああもしたらごきげんが、と気をおもみなさいました。それは奥様を呼び捨てにもなさらないで、「綾さん、綾さん」と、さんづけになさるのでも知れます。旦那様がこれですから、奥様はおうちを温泉の宿のような気で、働くという昼があるでなければ、休むという夜があるでもなし、毎日好いた事して暮らしました。「お定、きょうは幾日だっけねえ」と、日も御存じないことがある。たまたま壁の暦を見て、時のたつのに驚きましたくらい。夢の間に軒の花しょうぶも枯れ、その年の八せんとなれば甲子までも降り続けて、川の水も赤く濁り、台所の雨も寂しく、味噌もかびました。祇園の祭には青すだれを掛けてはおろし、土用の丑のうなぎも盆の勘定となって、地獄の釜のふたのあくかと思えば、すぐに仏の花も捨て、それに赤痢の流行で芝居の太鼓も回りません。奥様は外のお楽しみをなさりたいにも、小諸は倹約なじみな所で、お茶の先生は上田へ引き越し、謡曲の師匠はあめ菓子を売って歩き、見るものも聞くものもすくないのですから、ただかぎりあるお家のなかのお楽しみばかり。思えば飽きもなさるはずです。しまいには絹ハンケチも鼻をかんで捨て、香水は惜しげもなくお寝間に振り掛け、気に入らぬ髪は結い立てをかきこわして二度も三度も結わせ、夜食好みをなさるようになって、糠味噌の新づけに花がつおをかけさせ、茶づけを召し上がったあとで、「もっと何かおいしい物はないか、」とおっしゃるのでした。新酔月の料理も二口三口召し上がってみて、犬にくれました。女の楽しみほど短いものはありません。奥様はその楽しみにすら疲れて、飽き飽きとなさいました。

「毎日、毎日、同じ事をするのかなア。」

というのは、柱にもたれてのおひとりごとでした。浮気な楽しみが奥様への置きみやげは、たったこのひ

试读结束：需要全本请在线购买：www.ertc